

# 300年先のネット社会の「文法」は日本の「ガングロ」感性がリードする

MIT(マサチューセッツ工科大学) メディアラボ 客員教授 中村伊知哉氏

世界のIT研究を先導するMIT(マサチューセッツ工科大学)のメディアラボ。ネグロポンテ教授たちが、コンピュータこそが産業や学問のパラダイムを変えると、1980年に設立した。「未来は予測するものではなく、創り出すもの(Inventing Future)」をモットーとするそんなメディアラボで、客員教授を務めるのが中村氏だ。国境、官民、産学という枠組みにとらわれず、縦横無尽に活躍する氏に、日本のITの未来、それを胚胎する新世代文化について尋ねた。

## ブロードバンドになると日本は先進国で米は後進国に

—かつては郵政省の官僚として通信や放送の政策づくりにかかわり、現在は米国と日本でメディア研究をしているという立場から、日本のITの現状をどのようにご覧になりますか？

民間企業が責任をもって行うというのと、どこかでお上に頼ってしまうという2つの構造があって、今はどっちつかずの状況でしょう。光ファイバーのインフラなんて、国に全部任せる気だったら、道路工事を1年ストップして10兆円ぐらいかければ引けてしまうわけですけど、最近はそういう強権発動が好まれません。

そうはいつでも、ブロードバンドで日本は面白い位置にいると思っています。ブロードバンドというなら、最低限、100MBクラス



だれでも簡単に音楽を楽しめるトイ・シンフォニー。CAMPのワークショップで子供たちも楽しむことができる。



MITメディアラボで研究している「考える靴」。ウェアラブル・テクノロジーの進化で肉体がメディアになる日も近い。

の光ファイバーで動画がジャブジャブ流れないと次世代という感じがしませんが、この点、米国はブロードバンドへの移行について明確な青写真が描けないでいます。それを本気でやろうとしているのは、日本だけ。僕は、このままだと米国はインターネット後進国になってしまう可能性さえあると思います。

—これからはコンテンツや使い勝手が大切で、使う側がそれを便利だと思わないとなかなか普及しません。利用者サイドの意識の変化はどうでしょう？

大阪やバリの食べ物おいしいというのは、順番からいうと、まずそこに優秀なコックやシェフがいたからではなくて、舌の肥えた大衆がいたからですね。同じことで、新しい技術がうまくいくためには、それを使う人が洗練されていないといけません。つまり、メディアや表現の様式という文化の問題。その点でも日本って面白いんですよ。例えば、日本の子供たちって、みんな携帯電話でメールをやりとりしてますよね。目の前で2人座っているながら、なんにもしゃべらないで、携帯でチャットをしている。しかも親指だけで器用に。アレって変ですよ。そのヘンテコさってのは、今の日本の財産じゃないかと思う。

メディアラボの教授たちが東京にやってきたときに、何か面白いものを見せろということで、まず秋葉原で携帯電話の売り場を見せて、それから渋谷で「ガングロ」の女子高校生を探しました。「あれはなんだ？」というから、「あれが、世界に冠たる携帯コミュニケーションの文化を引っ張ってきた連中だ。紫式部以来、千年ぶりに日本女性が世界文化をリードしているんだ」といったら全然通じなくてね(笑)。

それはともあれ、彼女らにとっては、ブロードバンド以前に、携帯メールで互いにつながっているという感覚が大事なわけです。たったの1ビットでもいい。便利だということ以

上に、「かわいい」とか「面白い」という感じだけで携帯電話を使いこなしている。この感覚は日本でも、新しいネット世代の特徴ですね。そうした世代が新しく生まれていて、何かヘンテコだけれども、面白そうなメディアを生み出している。これは世界中で日本だけの特徴だと思うんです。

これからは携帯電話でも映像を送れるようになる。日常生活の中で映像で考え、映像でコミュニケーションするようになるかもしれない。それを、世界中で最初にやりこなすのは、僕は日本の子供たちではないかと思う。映像コミュニケーションで世界がボーダーレスにつながったとき、彼らがどういう表現をし始めるのか、どういうコミュニティーをつくっていくのかに大いに注目しています。

## 3世紀後の社会をもっと空想してもいい

—そういう新しい動きに、現場の技術者たちは日々の仕事に追われ、なかなか気づくことができないようにも思います。

デジタルやバイオのような次の社会を開く技術は出てきている。にもかかわらず、閉塞感が漂うのだとすれば、それは、新技術への期待が、既にある近代の体系を強くするという方向でしか発想されていないからだと思います。つまり、もっと便利にとか、もっと機能的にとか、もっと速くとか、そういうことだけなんですね。「昨日より今日の方がもっと速くなくてはいけない」という一種の進化主義が前提にある。だから、進化のスピードがちょっとでも遅くなると行き詰まってしまう。

僕はネットやデジタルには、近代社会の価値観をガシャッと壊して、文字どおり新しい価値観を生み出すだけの力があると思っています。だから、ときには長期的な視点で、技術の先を考えることが大切だと思うんです。

なかむら・いちや

1961年、京都府生まれ。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド「少年ナイフ」のディレクターとして活躍。84年、郵政省入省。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は郵政大臣官房総務課課長補佐を務める。98年、郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就任。同年、マサチューセッツ工科大学メディアラボ客員教授に就任。現在は、MITのほか、関西文化学術研究都市に開設された子供センター「CAMP」でも、子供とメディアの関係を研究。さらに、東京では音楽業界人とともに、コンテンツをデジタルでデリバリーするためのコンソーシアムづくりや、若手官僚らとともに次の情報通信行政のあり方を考える「情報政策デザイン会議」などを主宰する。故・小渕恵三元首相に勧められたというちょうネクタイがトレードマーク。著書に「インターネット、自由を我等に」(アスキー出版局)などがある。

ホームページ：<http://www.ichiya.org>



グーテンベルクの活版技術は、世界に聖書を広めただけでなく、知識の民衆化をもたらしました。それが数世紀後、近代国家や資本主義を成立させる基盤になった。もちろん、グーテンベルクがそれを予期していたわけではありません。しかし、歴史に学べば、一つの技術が社会の枠組みをつくりかえることもあり得るということですね。だから、今の技術が3世紀、4世紀後にどんな社会をもたらすかということについて、もっと空想しているんじゃないか。特にエンジニアにとっては、今こそが空想するチャンスだし、面白い時代だと思うんです。

もちろん、科学者、技術者の役割には空想だけではなくて、それをどうリアライズ＝現実化するかということがあります。たまたま今僕がいる、MITメディアラボのテーマが、「イマジン&リアライズ」といって、頭の中でイメージして実際に作り出すということなんです。頭の中で想像して、実際に創造する……。

——その繰り返しを通して、未来を構想していくということですね。メディアラボでは中村さんは主にどんな研究をされているのですか？

子供とメディアに関連する研究です。具体的にはそのための研究センターをつくらうと準備しています。「MIT Okawa Center for Future Children」というのですが、それに先だって京都にある「CAMP (Children's

Art Museum & Park)」の活動に参加しています。日本初のワークショップ専門の子供センターです。

子供たちがロボット制作キットや、粘土アニメを使って、何かを作り、表現し、アイデアを交換する。それを世界中の人たちとネットで共有する、そういう試みです。映像でもダンスでも、表現様式はなんでもいいんです。ワークショップには大人も参加していて、子供たちの、もっと欲しい技術はこうだ、やりたい表現の様式はこうだという欲求を受けて形にしたりもします。

今度、「本を作る」というワークショップを始めます。文字どおり、紙作りから考えて、絵をかいて、印刷して、とじて、それを本屋さんにおいてもらうというところまでやります。各国の子供博物館でも同じようなことをしているところがありますから、そこと連動しようとも考えています。

### 子供たちの表現の中にこそ未来の技術が見えてくる

——これらの研究所は「子供たちが情報化社会の創造を先導していく」というCSKグループの創業者、故・大川功氏の理念を具体化させたものですね。

ネットやデジタルの社会では、表現や認識の仕方がこれまでとは変わってくるでしょう。そこでの文法みたいなものは、生まれたときからデジタルに浸ってきた世代がつくり上げ

ていくべきものだと僕は思います。それができるまでにはあと50年ぐらいかかるけれど、僕ら旧世代が、古い認識の仕方でもなかなか切り開けない。ネット上に生まれたバーチャルなコミュニティで、どう生きていくかということも、新しい世代の課題です。彼らも一生懸命、話し合いながら、喧嘩しながらそれと付き合っていくんだらうけれども、ただ、そのきっかけは僕らの世代が提供しなければと思うんです。

僕はネットやデジタルが出てきたとき、僕らの世代はやられちゃうと思った。その危機感から研究がスタートしています。今の20代でも、ほっておくとやられちゃいますよ。結局あと20年や30年は僕らの世代が引っ張っていくしかないんだけれども、そのためには、過去の上の世代がやっていたのよりもものすごい努力や勉強をしないと。

——新たな感性を取り入れるという視点は、エンジニアにも大切ですね。これからのサービスや技術は、絶えず未来のためのものを包含していないといけない。

そうだと思います。僕自身は、基本的に世代や国境を超えた「場」づくりをしています。京都の研究センターはぜひ企業の人たちにも使ってほしい。子供たちがオンライン、オフラインで集まってきているいろいろな言い合うので、新しい技術のアイデアの場にもなる。エンジニアにとって、技術の商品化のためのヒントもたくさんあるはずですよ。